

長塚圭史氏ワークショップ概要①

日時：2018年9月2日（日）、3日（月）、4日（火）

12時～18時（準備、休憩、片付け等含む）

場所：国文学研究資料館 第一会議室

参加者：

- ・「ないじえる芸術共創ラボ」アーティスト・イン・レジデンス（AIR）長塚圭史氏
- ・俳優（敬称略）

9/2（日）：坂本慶介、曹成河、高木稟、藤間爽子、八十田勇一、李千鶴

9/3（月）：坂本慶介、曹成河、菅原永二、高木稟、引間文佳、藤間爽子、八十田勇一、李千鶴

9/4（火）：坂本慶介、曹成河、菅原永二、高木稟、引間文佳、藤間爽子、八十田勇一、李千鶴

- ・国文学研究資料館 入口教授、有澤特任助教

内容：

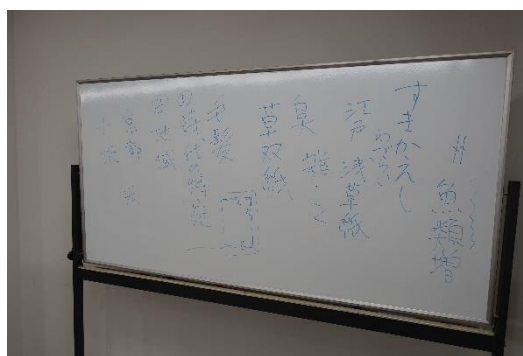
9/2（日）

- ・入口先生の講義

「近世日本の食生活を書籍に漉き混まれた毛髪のアナライズによって復元する」より。

- ・山東京伝作黄表紙『人間一生胸算用(にんげんいっしょうむなざんよう)』の朗読。

そのうえで、本作と、その前作となる『心学早染艸(しんがくはやそめぐさ)』に登場する善魂・悪魂という、人間の行動を左右する善心と悪心を擬人化したユニークなキャラクターに注目し、善心と悪心の本質を追いかける作業に入っていた。



9/3 (月)

・引き続き、悪魂・善魂に注目したワークショップ。

江戸時代でも特に人気が高かった悪魂は、坂東三津五郎によって「悪魂躍り」なるものまで考案され歌舞伎にとり入れられ、現代では「三社祭」のなかで演じられている。この「悪魂躍り」を、現代の役者が身体に落とし込む作業を行った。葛飾北斎が『踊独稽古（おどりひとりげいこ）』という作品のなかで「悪魂踊り」を図式化して解説しているのので、この説明を手がかりに解釈を行った。最初に、日本舞踊家の藤間爽子氏と、ダンサーの引間文佳氏という、全く違う身体、背景を持つ二人の舞踏のプロが、それぞれの鍛え抜かれた身体で、悪魂躍りをなぞっていく。同じ動きをしても、コンテンポラリーなどを得意とする引間さ氏の身体は上へ上へと伸び、日本舞踊の藤間氏の身体はしっかりと地面に降りてゆくイメージ。手や脚の使い方も基本的に両名は全く違う。

その後、俳優陣揃って二人を手本に、「悪魂躍り」を練習した。北斎『躍独稽古』の説明は、一見簡単そうに見えるが、実は奇抜な動きであり、俳優陣はみな必死な様子でついていき、ひととおり全員が悪魂躍りを身体に落とし込んだ。



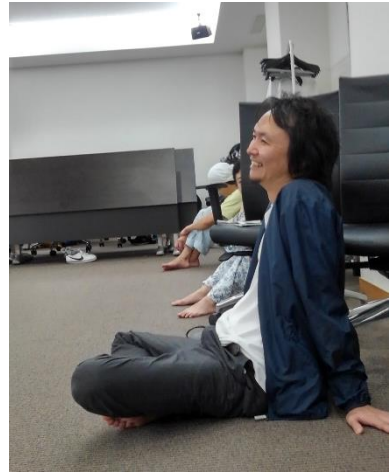
・悪魂・善魂の本質を追究するワークショップ。

長塚AIRより、「善魂と悪魂の本質を身体で表現するとどうなるか？」との問いがあった。善魂と悪魂は、人間の身体に入ってその行動を左右するもので、擬人化された概念の身体表現を試みることとなり、2チームに別れて即興演劇を行うこととなった。

最初は、八十田氏・菅原氏・成河氏・藤間氏のチーム。酔っぱらって財布を落とした八十田氏、それを拾った菅原氏。善魂（藤間氏）は財布を返してあげようよと促し、悪魂（成河氏）は貰っちゃえよとそそのかす。善人の菅原氏には、いつも善魂が寄り添っているが、悪魂の誘惑はエスカレートし、菅原氏は財布をポケットに仕舞いかけては返しに行きかける。善魂と悪魂とで、菅原氏の行動を操るべく激しく引っ張りあう。結局善魂の勧めに従い、財布を返した菅原氏。ラストは、八十田氏からお礼として貰った1000円で悪魂を呑みに誘うという展開となった。しょんぼりする悪魂（成河氏）に向かって「これだけになっちゃったけど…」と話しかける菅原氏であった。

次は、高木氏・李氏・引間氏・坂本氏のチーム。善人の高木氏は人助けのお礼に大切な本を貰うが、やってきた悪魂にそそのかされ、その本を売ってしまうのか？という物語。悪魂の引間氏、前に試みた悪魂躍りを応用する。「それを売れば楽しいことたくさんできますよー」と誘惑する李氏と坂本氏。悩む善人の高木氏。いつのまにか李氏も悪魂となり、引間氏とともに高木氏の周りで躍り狂う。「♪お肉が買える、売っちゃえよ♪」という歌と躍りに惑わされた高木氏は、ついに大切な本を売り飛ばす。しかし高木氏は本を売ったお金を盗まれてしまう。今度はお金を手にしたスリ（坂本氏）に乗り換える悪魂達。女の人や奥さん役だったはずの李氏が、いつの間にか悪魂になっているのが面白く、悪魂がお金の動きにつられて移動するものなるほど！と思わされる作品となった。

俳優陣からは、「善魂・悪魂のお面がないので、男性か女性か、子供か大人かという要素が大きく関わりそう」との感想があった。たしかに人間だったのにいつの間にか悪魂になっていた、善魂を彼女のように連れているように見えたりしたのはお面がないからで、表現の在り方がお面の有り無しに大きく左右されることが想定された。更に、善魂・悪魂はしゃべるのか、そもそも善悪とは何だろう、と、演劇的な手法の問題から哲学的な問題にいたるまで全員で意見を出し合った。この後チーム替えをしてもう一度同じ即興演劇を試みた。



9/4 (火)

・黄表紙の実物に触れる。

9月3日に扱った『人間一生胸算用』が当館に所蔵されているため、実物を閲覧した。俳優陣は久しぶりに触れる黄表紙の軽さや小ささ、文字や絵の細かさを再確認していた。



・『江戸生艶気蒲焼（えどうまれうわきのかばやき）』の立体化。

山東京伝黄表紙の傑作と謳われる『江戸生艶気蒲焼』の朗読を行う。前回のワークショップでも同作品を全員で朗読したが、今回も同様に一文ずつ順番に読んでゆく。次に分からない言葉や文章について、入口敦志教授と有澤知世特任助教より適宜解説を加えながら読むことで、全体の意味や、台詞の関係について詳細に把握する。

それを踏まえて再度全員で朗読を行うが、この時、当時の流行歌を羅列した箇所をひとり一曲ずつ読み上げたり、女性だけ、男性だけに分かれて読み上げたりといった演劇的工夫を取り入れた。

その後配役を決め、台詞の部分のみの読み上げで物語を進行させた。この際車座になり、その場面に登場する人物のみが中央で台詞を言うという方法をとることで、ひとつひとつの場面が際立ち、台詞の順番や台詞がない人物の役割についても議論と工夫を重ねながら読み進めることとなった。徐々に複雑化してゆき、鳴り物（太鼓など）や扇子といった小道具を活用することで、演劇作品のように立体化された。

